英米文化の背景
「英米人の迷信・俗信」考（5）Ⅱ 死

—その4　埋葬・墓地と墓・四つ辻埋葬・弔いの宴・追悼式

藤高　邦宏

倉敷芸術科学大学教養学部

（1996年9月30日　受理）

は じ め に

古来，人々は「死者を墓地のどの領域に埋葬するか」を大きな問題としてきた。一般に欧米では，「墓地の東の領域，次いで南，西」の順でその人気の度合いが下がっていく。このいわれは「万人の復活は東から」の信によるものであるが，もともとは人々の太古以来の「太陽崇拝」にその源があり，太陽の軌跡の「右回り」に由来するものとされる。太陽から最も遠い北の領域は，かつては徹底的に敬遠された。この敬遠の傾向は今日においても，イギリスの一部の地方ではまだいくぶんか残っているようである。この「墓地の北方角の領域」には，洗礼を受けないまま死亡した乳幼児，罪人，それに一部の自殺者等が夜間密かに埋葬されたとされる［本文3参照］。

さらに，かつては殺人等の犯罪者，自殺者（自殺は大罪とされた），不実の女，またその他魔女，吸血鬼と見做された者は，一般の墓地ではなく「四つ辻」に埋葬された。しかも，その者の霊がこの世に舞い戻ることがないようにと，場合によっては遺体の頭部や心臓部に鉄や木の「杭」が打ち込まれて埋葬されたと言われる［本文4参照］。

当シリーズの今回は，主として「埋葬」に関する事柄を中心に英米人の古今の「習慣」のあらましと，併せてそこに見出される「迷信・俗信」を考察する。またその際に，事項によっては若干の議論をも試みたい。

1　埋　葬（interment; burial）

教会での礼拝式の外に，墓地でも埋葬前に礼拝式が行われる。牧師が *The Book of Common Prayer*（祈祷書）の中から“･･･earth to earth, ashes to ashes, dust to dust･･･（･･･土を土に，灰を灰に，塵を塵に返して･･･）”の決まり文句を唱え，死者の冥福を祈りつつ埋葬がなされる。遺族はじめ会葬者は携えている（また用意されてある）花，マンネンロウ，それにイチイ，ツゲの小枝等を墓穴の棺の上に投げ入れる。その小枝を形見に持ち帰り，大切に保存するのもよしとされる。

＊一部の地域では，「墓での礼拝式には，一般の死者の場合は近親者のみが出席する。社会的

地位の高い人の場合は墓地まで葬列行進をする。また，カトリック教徒なら多くの知己が霊柩車につき従う」とされる。これは，特にNew England等の風習とされる。

＊司祭が「土を土に，･･･」と唱えるとき，「喪主がまず最初に棺に土を投げ入れるもの」とされ，この慣習は現在も守られている。

＊大方の地域では，「会葬者は全員，一かけらずつでも土を投げ入れるべき」とされる。

＊「葬儀用の花輪は，墓の上またはその傍に置かれねばならない。」花輪の働きについてはいろいろなことが言われている。その一つは，「死者の魂がこの世に戻ってこないようにそこに繋ぎ留める役目をするもの」であるとか，また，「昔からの副葬品の習慣が形を変えて，死者の魂を慰めるために使われるもの」とも言われる。[1)]

ところで葬儀における「花」に関しては，それは「新生」を表わすので，棺に入れるものにせよ墓に投げ入れるものにせよ，Charles Kightly によれば「1860年代頃までは異教的風習と考えられていた」[2)] とされる。しかしながらShakespeare, *Romeo and Juliet*（1597）には，娘ジュリエットの死を信じたキャピュレットの次の言葉がある。

> Our bridal flowers serve for a bury'd corse, ･･･[3)]
> 婚礼の花は，亡骸の埋葬のために使うがよい。･･･

この作品の内容における時代と場所等を推測してみても，Kightlyの見解はかなり割引して考えねばならないように思われる。この点については，John Brandの「原始キリスト教徒たちは，花をふさわしくない習慣だと厳しく咎めた」[4)] の見解が注目される。つまり，花が「異教的風習」と見做された時代は随分早い時代であり，しかもその期間は比較的短かったのではないか—イギリスの場合には，キリスト教が入ってきてからまだ間もない七世紀初め頃のことではないか—と考えるほうが妥当に思われる。

＊「東西方向に掘られた墓穴の，東の方角に棺の足部がくるように埋葬される。」この理由は，最後の審判の日に太陽が昇るとき，死者が東の方角をちゃんと見ていられるようにするためと言われる。[5)] ところが，最後の審判の日には天地がひっくり返るとの一部の確信から，うつぶせの姿勢で埋葬することもあったと言われる。また，古い時代には，死体は胎児と同じ姿勢で，両膝を顎に引きつけて埋葬されたり，「座葬」と呼ばれる座った姿勢での埋葬もあったようである。

＊一般の人々が足を東に向けるのとは反対に，「聖職者は万人復活のときに，いつでも会衆に向かって説教ができるようにと逆方向に埋葬される。」これは今日でも見られるものと言われる。

＊「会葬者の人数は，奇数になってはいけないとされた。」かつては，この人員が非常に厳しくチェックされ，もしそれが奇数であれば，死出の旅の道連れを欲しがる死者が会葬者の一人をすぐに連れていく，と恐れられた。[6)]

＊かつては「会葬を依頼されたら必ず出席する義務があった。」逆に，招かれていないのに参列すると大変な無作法者と見做され，場合によっては酷く非難されたりした。

＊「教会墓地で，会葬者に太陽がきらきら照りつけると，次はその人がそこに埋葬されることになる」と言われる。これについては，かつて会葬者は死者に羨ましがられないようにするため，黒の粗布等を身に着けて目立たぬようにする習慣があったのだが，「会葬者に太陽がきらきら照りつけると」その人は目立つ存在となってしまい，死者に羨ましがられ「死出の旅の道連れにされる」という理由が考えられるようである。[7]

＊「埋葬時に雨が降るのは縁起がよい」とされる。George Eliot, *Adam Bede*（1859）に次の箇所が見られる。

> 'It 'ud ha' been better luck if they'd ha' buried him i' the forenoon when the rain was fallin'.' [8]
> 「もしも彼らが，午前中雨が降っているときに彼を埋葬していたなら，縁起がよかっただろうに。」

尚，「天（神）の露」である雨が降り注ぐ遺体は，[太陽の降り注ぐ花嫁と同様に] 喜ばしいものとされ，"Happy is [the bride the sun shines on, and] the corpse the rain rains on." [9] の諺も見られる。

＊「葬式は常に３つ続くもの。」Northumberlandで，またDurhamでも言われる。

少し変わった習慣に，スコットランド高地地方及びアイルランドのゲール族には，再婚が予測される場合の未亡人の行為に関するものがある。

＊「未亡人は，夫の棺がふたをされ埋葬される前に，夫の経帷子の結び目をすべて解いておけば，再婚を妨げるものがなくなる」[10] とされた。

死者を埋葬した後，その上に墓碑銘（epitaph）の刻まれた墓石（tombstone）が置かれる。また教会内に金属（真ちゅう・銅等），石，木等で作られた，死者の美徳を記した位牌（tablet）が取り付けられることもある。

2　土葬（interment; burial）と火葬（cremation）

英米のみならず西欧では，一般に埋葬と言えば土葬を意味してきたようである。特にカトリック系の宗派では，むしろ火葬を禁じているほどである。火葬を禁じる理由は，遺体は最後の審判の日までそのままでいるべきだという信仰に根ざしており，「火葬にしてしまうと来世の復活（resurrection）に蘇生できなくなる」[11] というものである。今日では衛生上の点から，役所では火葬を薦めることもあるようだが，英国は言うまでもなく米国でも火葬は少ないと見てよいようである。[12] 尚，英米共に埋葬については法的規制はなく，土葬，火葬いずれをも選ぶことができる。

ただ，西欧では古い時代，特にキリスト教以前，つまり七世紀以前の時代から，土葬が主流

であったかどうかについては疑問視されてもいる。これについて井上義昌氏は，次のような「語源」に基づく興味深い見解を示している。「『葬儀』の意味を表す'funeral'は，サンスクリット'*fhu-mas*'からきた'*fumus*(=smoke)'が語源であり，この語はやがて'burial'の意味となり，語形が '*funeralis*(a.)'となった。この'smoke'とは，言うまでもなく死体焼却の際の『煙』である。太古には火葬がかなり広く行われていたらしい。」[13)]

3 墓地（churchyard; graveyard; cemetery）と墓（grave）

墓地には，寺院内にある教会墓地（churchyard）や，その他の共同墓地（cemetery）等がある。墓には，死者が出る度ごとに造られる墓もあれば，古くからの先祖伝来の地下納骨所（family vault）もあり，また大掛かりで壮麗な墓（mausoleum）等もある。

「万人の復活は東の方角からなされる」との信から，墓地内では東の領域が最も人気が高い。次いで太陽の運行と同じ方向（右回り）に南，西，そして最後に北の領域の順となる。特に墓地の北端域は人々から最も敬遠され，かつては洗礼を受けないまま死亡した乳幼児や，教区民以外の者，罪人，また場合によっては自殺者等の埋葬場所［次項参照］に当てられたりした。[14)] しかもこうした場合の埋葬は，人目を憚って密かになされたようである。次は，Thomas Hardy, *Tess of the D'urbervilles*（1891）に見られる「赤ん坊の埋葬」場面の描写である。

> So the baby was ··· buried by lantern-light, at the cost of a shilling and a pint of beer to the sexton, in that shabby corner of God's allotment where he let the nettles grow, and where all unbaptized infants, notorious drunkards, suicides, and others of the conjecturally damned were laid.[15)]
>
> そこで寺男には１シリングとビールを一杯はずんで，赤ん坊は･･･ランタンの明かりを頼りに，神の割り当てたもうた薄汚い片隅に埋葬された。そこには，神がイラクサを茂らせ，洗礼を受けていない幼児や，名だたる酔いどれ，自殺者，その他地獄行きとしか思えぬような手合いがみんな葬られていた。

このいわゆる「神の割り当てたもうた薄汚い片隅」が墓地の北方角の領域なのである。一般に，墓地の北領域が敬遠される主たる理由は「万人復活の順で北が最後だから」とされるが，その他の理由として「北は悪魔の支配する方角だから」[16)] というものがある。もっとも，この理由は「主たる理由に関連する付随的理由」とも言えそうである—と言うのは，その根本には人々の太古以来の「太陽崇拝」からくる「東や南の方角を（最）善とし，北方角を最悪とする」という考え方があろうと思われるからである。（日本でも，北の方角が古来敬遠される傾向がある。例えば，「北枕」に寝るのは死者の寝姿になり短命になるとか，また墓石の正面が「北」を向いている墓を造ると「またキタまたキタ」と死人が続出する，とか言われたりする。）今日の英米の地方の墓地では，まだ北領域敬遠が少々見られるようだが，都会の墓地ではこれは

全くなく，どこも実に込み合っている。

さらに，墓地と墓については次のようなことが言われる。

＊「近親者が死亡したとき，新しい墓地に埋葬することは考えものである。」これは親族の間でよく議論される問題であったらしい。人々は，新しいものを使うと悪魔が害を及ぼす恐れがある，と心配したのである。[17]

＊死者を新しい墓地に埋葬した場合，「死者の魂が悪魔に捕らえられるか，あるいは死者は，次の死者がその墓地に埋葬されるまで『墓守』—夜になると二輪馬車で近隣を駆けめぐり，病人等の死の床にある者を早く来るようにと呼び寄せる役目をする—を務めねばならない」とされた。この「墓守」は一般に，その年に埋葬された最初の死者が務め，年内はその務めを果たさねばならないものとされた。[18]

＊「墓穴を早くから掘って用意しておいてはならない。」

＊「墓穴に棺を納めた後には，長い間墓を開けたままにしておいてはいけない。」これら二項については，これをすればさらに新たな死者が出ることになる，と恐れられた。

＊「日曜日に一日中墓穴を開けたままにしておくと，一か月以内に二人の死者が出る。その墓が男性のものならば女性が二人，女性のものならば男性が二人死亡する」と言われた。これはイングランドの中部地区，特にその西部での伝承である。

＊「墓が日曜日を越えて開けたままにされると，次の日曜日までに死者が出る。」この項も前項も共に「日曜日」，つまりキリスト教の「安息日」に関わっている。

＊「埋葬しない状態で墓が夜じゅう開けておかれると，すぐに家族の誰かが死ぬ。」

＊「墓が金曜日にふたされると，年内にその家族から次の死者が出る。」

＊「元旦に墓のふたをする（埋葬する）と，その年には毎月少なくとも一人の教区民が死亡する。」

＊「墓石を建てることによって，古い墓を乱してはならない。これをすれば死の先触れをすることになる」と言われる。

一般に埋葬は地面から２メートルくらいの深さでなされ，古いものほどさらに深いところにある場合が多い。[19] しかしながら墓地の中で人気の高い領域になると，埋葬が込み合っており，またいくつもの層にもなっているので，新しい墓穴を掘っているときに近くの墓や下層の古い墓を乱してしまう恐れがある。しかし，肉親の墓であれ，他人の墓であれ，墓を乱すことによって死者を冒涜してはならないのである。

また，上掲の諸項に関連して，次のような奇異な迷信・俗信もある。

＊「開いている墓穴の上で，婚約，その他契約，約束を交わせば，それがめでたく履行されることになる。」死者の棺が横たわる墓穴の上で握手をして誓えば，それを破った場合には，その誓いの証人たる死者によって復讐される，[20] と信じられた。（日本にもこれに相通じる俗信があり，「葬儀のときにもち上がった縁談は良縁である」と言われる。）

4 自殺者・犯罪者等の「四つ辻埋葬（burial at crossroads）」

「聖なる儀式からはずされるすべての者は，かつては『四つ辻』に埋葬される風習があった。」この埋葬に該当するのは，罪人，自殺者，不実の女，その他吸血鬼や魔女とされた者であった。また場合によっては，こうした死者についてはその霊を永遠にそこに釘付けしておくため，死体の頭部や心臓部に鉄や木の「杭」が打ち込まれた。この「四つ辻」への埋葬の理由は，「この者たちの霊がこの世に舞い戻ってきては困るので，どの方角を選べばよいのか判りにくくするため」とされた。[21] これは今日から言えば実に単純な理由と言えようが，古人にとっては実に真面目な発想による理由であったはずである。

因みに，彼らに打ち込まれた「杭」に関しては，特に「鉄は魔物を寄せつけない」[22] と信じられたために，「鉄製の杭」がよく用いられたようである。また，とりわけ自殺者については，遺体にヒイラギの木の枝等が「杭」代わりに刺されて埋葬されることもあった。[23]

William Shakespeare, *Hamlet* に，「自殺の疑いをかけられたオフィーリアの埋葬」場面がある。オフィーリアの兄レイアティーズは，貴族の家柄の者に対するその粗末な埋葬の仕方に憤慨し，牧師に抗議をしている。

Laer. What ceremony else?
Priest. Her obsequies have been as far enlarg'd
As we have warranty: Her death was doubtful;
And, but that great command o'ersways the order,
She should in ground unsanctify'd have lodg'd
Till the last trumpet; ･･･
･･･
Laer. Must there no more be done?
Priest. No more be done;
We should profane the service of the dead,
To sing a requiem, and such rest to her
As to peace-parted souls.[24]

レイアティーズ　「儀式はこれだけですか？」
牧師　「教会の許す限り，せいぜい丁重に執り行い申した。死因に怪しい節がございますれば，もし慣例を曲げよとの大命なくば，不浄の地に埋められ，そのまま最後の審判のラッパの鳴り響くのを待たねばならなかったのでございます。･･･
･･･」
レイアティーズ　「どうしてもこれ以上は？」
牧師　「許されませぬ。心安らかにこの世を去りし者と同様に，ミサを歌い死後の平穏を祈りますれば，なまじっか葬儀の神聖を汚すことになりましょうぞ。」

オフィーリアはもしかすると「不浄の地（四つ辻）」に埋葬されるはめになっていたかもしれないのである。

「四つ辻」に対する考え方は，歴史の中で変化してきた。異教時代のイギリスでは「四つ辻」は神聖な場とされ，チュートン族はそこに祠を立てて神を祀るのが常であったとされる。[25] 七世紀になってキリスト教優勢の時代になってからは，「四つ辻」に対する考え方が大きく様変わりし，それが妖怪，魔物の類と結びつけられるようになり，処刑場等もこうした十字路に設けられるようになったとされる。Ebenezer E. Brewerは処刑場について，「それは古代チュートン人の生贄を捧げる習慣の連想から生じた」[26] との見解を示している。

5　埋葬後の「弔いの宴（funeral repast）」

死者の埋葬が終わると，葬儀の一応の締めくくりとして会葬者への労いに「弔いの宴」が催される。これは今日でも行われており，一般にご馳走と酒類が大いに振る舞われる。

＊「弔いの宴では，必ずハム料理が出されねばならない。」古くから'buried with ham（ハムとともに埋葬される）'という言い回しがあり，「立派な葬儀であった」の意味を表すとされる。[27]

6　故人の「追悼式（memorial service）」

葬儀後の最初の日曜日には，死者の「追悼式」が行われる。これについては，例えば，ウェールズ各地やイングランドとの境界地方で次のようなことが言われる。

＊「会葬した者は全員，追悼式に出席しなければならない。」

また同地域では，遺族の慎みについても次のように言われる。

＊「葬儀後，追悼式の日までは遺族は外出を慎むべきである。」これを怠ると不運に見舞われるとされる。

［次号「服喪・喪服とヴェール・弔意の黒・半旗」等に続く。］

Acknowledgments :
貴重なご教示をいただいたAmy R. Staley女史（中国短大講師）に厚くお礼申し上げたい。

Notes　＜膨大化回避のため，＊印26項の各提示文への付注は原則として割愛する。＞

1）"Burial," *Dictionary of Symbols and Imagery*, ed. Ad de Vries（Amsterdam: North-Holland, 1974）71(R), 15-e.

2）"Funerals," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly（London: Thames and Hudson, 1986）120(R).

3）William Shakespeare, *Romeo and Juliet*, iv. 5, *Malone's Shakespeare*, ed. Edmond Malone, vol.9（London, 1790; New York: AMS, 1968）149.

4）John Brand, *Observations on the Popular Antiquities of Great Britain*, vol.2（London, 1848-9; New York: AMS, 1970）308.

Gough,･･･, says: "The tombs were decked with flowers, particularly roses and lilies. The Greeks used the amaranth and polyanthus ･･･, parsley, myrtle. The Romans added fillets or bandeaux of wool. The primitive Christians reprobated these as impertinent practices: but in Prudentius's time they had adopted them, and they

obtain, in a degree, in some parts of our own country, as the garland ··· and the enclosure of roses round graves ···"

5) James Kircup, *British Traditions and Superstitions* (Tokyo: Asahi, 1975) 31.

6) "Funerals," Kightly 121 (L).

7) "Funeral customs and beliefs, "*Funk and Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology and Legend*, ed. Maria Leach & Jerome Fried (1949; New York: Harper & Row, 1984) 427.

8) George Eliot, *Adam Bede*, Book Second-18 (1859; London: Penguin, 1980) 233. 尚，この引用は，"Corpse, rain rains on," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989; Oxford: Oxford UP, 1990) 98にも紹介されている。

9) "Bride the sun ···,Happy is the," *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, rev. F. P. Wilson, 3rd ed. (Oxford: Oxford UP, 1935; rpt. Oxford: Clarendon, 1992) 85.

10) "Corpse," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (1949; New York: Greenwood, 1969) 88(L).

··· if a widow has any intention of marrying again, she unties the knots on her dead husband's grave-clothes before the coffin is shut down on him. This removes all impediments to her future marriage.

11) "Funeral,"『英米風物資料辞典』，井上義昌編（東京：開拓社, 1971）373.

12)「英国は言うまでもなく米国でも火葬は少ない」については，次のような見解（反論）もある。

「死についての革命が徹底的な国々，たとえばイギリスでは，火葬が支配的な埋葬方式となっています。」伊藤晃・成瀬駒男訳，『死と歴史－西欧中世から現代へ』（東京：みすず書房, rpt. 1990）73. <orig.: Philippe Aries, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident du moyen age a nos jours* (Editions du Seuil, 1975).>

13) "Funeral," 井上 377.

14) J. Harvey Bloom, *Folk Lore, Old Customs and Superstitions in Shakespeare Land* (London:Mitchell Hughes and Clarke, 1929) 47.

It must not be forgotten that the north side of the churchyard was rarely if ever used in villages, except for the burials of suicides and the unbaptized. It lay in the shade, away from the sun. In almost every old churchyard the more ancient stones will be found on the south.

"Burial on north side of churchyard," Opie & Tatem 48.

15) Thomas Hardy, *Tess of the D'urbervilles*, XIV, vol. 1 (London, 1892; repro. from the original 1st ed., Tokyo: Nan'un-do, 1985) 190-91. 尚，この引用は，"葬儀,"『英語歳時記』「雑」，土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修，成田成寿編集（1969;東京：研究社, 1986）414-15にも紹介されている。

16) "North," De Vries 343, 4.

the place of the Devil: ···

"North," *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, ed. Gertrude Jobes, part 2 (New York: Scarecrow, 1962) 1181(L).

··· the abode of evil powers.

17) "Funeral," Radford 128(R).

"Burial: first in churchyard," Opie & Tatem 47.

1866 HENDERSON *Northern Counties* 89 [Aberdeen] There was great difficulty in bringing the new churchyard into use. No-one would be the first to bury his dead there, for it was believed that the first corpse laid there was a teind [tithe] to the Evil One.

("teind [tithe] to the Evil One" = 「悪魔に支払う十分の一税」)

18) "Churchyard watcher, "*E. & M. A. Radford Encyclopaedia of Superstitions*, ed. & rev. Cristina Hole (1948; London: Hutchinson, 1961) 101.

In many parts of Britain, and also in Brittany, it was believed that when a man was buried, he became the Watcher of the Churchyard until such time as he was relieved of his task by the interment of another corpse. A

variant of this tradition was that he who was first buried in any year became the Watcher, and served in that capacity for twelve months after his funeral. Until that time had passed, or until he was released by the next burial, he could not go to his rest, and was compelled to guard the graves in the churchyard and to summon all those in the parish who were about to die.

19) "Burial," 井上 154.

20) "Funerals," Kightly 121 (L).

In northern and eastern England, too, bargains and promises—including engagements to marry —were regarded as utterly binding if sealed by clasping hands over the open grave for the breaker of such an oath would speedily fall victim to the vengeance of the dead.

21) "Crossroads, "*The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets*, ed. Barbara G. Walker (New York: Harper Collins, 1983) 191.

Necromantic superstitions were encouraged by the custom of burying criminals and suicides in unhallowed ground at crossroads; clergymen said anyone so buried would walk as a ghost. Sometimes, such corpses were pinned down with a stake: "A stake was driven through them when deposited at the cross-roads in order to keep the ghost from wandering abroad." [Summers, V., 154-57.]

22) "Iron," De Vries 271 (L), 12-A.

protection against evil spirits, the most powerful weapon against witches: ・・・

"Iron deters evil," Opie & Tatem 209-10.

23) "Funeral," 井上 373.

24) Shakespeare, *Hamlet*, v.1, Malone's ed., vol.9, 395-96.

25) "Crossroads," Walker 190 (R)-91 (L).

" 葬儀," 成田 415.

26) "Cross-roads, Burial at," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed., 6th imp. (1870; London: Cassell, 1978) 281.

27) "Funerals," Kightly 121 (L).

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & the Americans–(5) II DEATH Part 4 : On the Customs and Superstitions of Burials, Churchyards & Graves, Funeral Repasts, and Memorial Services

Kunihiro FUJITAKA
Faculty of College of Liberal Arts and Science,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan
(Received September 30, 1996)

Some people in Europe and America are particular about the areas to bury the dead in the churchyard when they are engaged in interment. In fact, these people like best the area on the east side of the churchyard, and then the south and the west sides respectively: They detest the area on the north side of the churchyard. They have a good knowledge of the fact that in ancient times unbaptized infants, suicides, criminals, etc. were buried in the very northmost area of the churchyard.

We could explain that people's fondness for the "east," the "south," and the "west" in this order is originally based upon ancient people's "sun worship" in very remote ages. We know the preference for those directions in the churchyard coincides with that for the "sunwise" or "clockwise" movement of the sun, which people have had a sincere admiration for as the supreme god. And as an additional explanation of this preference, we could point out ancient people's belief that "north" must be "the abode of the Devil."

In this survey, I study a variety of superstitions concerning burials, churchyards & graves, funeral repasts, memorial services, etc., examining the manners and customs seen in them.